

(国語)

自分の思いや考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成 —文学作品の魅力を語りたくなる授業づくりを通して—

大阪市立太子橋小学校 日野朋子

1. 研究主題設定の理由

本校では、「豊かな心と自ら学び自ら考える力を育てる」を学校教育目標として掲げ、教育活動を進めている。

自ら学び、自ら考える力を育てるためには、授業者からの受動的な学びではいけない。能動的な学びを進めるために、級友である他者との対話を通して、学びを深めていくことが肝要である。授業者の授業観や指導法を見つめ直し、児童の学び方について考えていかなければならない。

そこで、令和2年度から3年間、研究教科を算数科とし、「主体的・対話的で深い学び」となるよう、問題解決型の学習過程において、自分の考えを説明したり級友の考えを聞いたりしながら対話的な学びが行われるよう指導してきた。交流の仕方を明確にしたり、具体物を工夫したりすることで、児童が主体的に学習を進めようとする姿が見られるようになった。

昨年度からは、研究教科を国語科とし、文学作品を読むことを通して自分の考えを表現できるよう研究を進めている。文学作品を読み、それらの内容的価値や表現的価値など自分が魅力を感じたものについて、級友や授業者とともに語り合うことによって、読みや学びを深めていくようにする。「魅力」というのは、自分が心惹かれたところやおもしろいと感じたところであり、作者が書いたものを全て肯定的に受け取るという意味ではない。つまり、本研究では、自分が魅力と感じた根拠や理由を明らかにしながら、主体的に文学作品や他者と関わろうとする児童の姿をめざす。よって、研究主題を「自分の思いや考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成」とし、副題を「文学作品の魅力を語りたくなる授業づくりを通して」とした。なお、「魅力を語る」には、魅力やよさを感じているからこそ表現できる言語活動を含んでいる。

2. 研究の趣旨

児童が文学作品を語りたくなるためには、まず授業者が文学作品をしっかりと分析し、魅力を語れなければならない。指導書を見て、何となく授業をするのではなく、児童の実態や教材の特性を踏まえ、適切な言語活動を設定する。そうすることで、付けたい力は身に付いていく。児童の読みを想定して授業の流れを考えたり、予め手立てを講じたりするためにも、授業者の教材分析は重要である。

そこで、研究の視点の一つめは、「読みが深まる言語活動と学習課題の設定」とした。授業者が文学作品を解釈・分析して特性を明らかにし、児童の実態を踏まえて付けたい力に応じた単元構想を立てるようにする。そして、毎時間の学習課題は何か適切かを探っていく。二つめは、「考えが深まる話し合いの手立て」である。どのようなメンバー構成や形態、方法にすれば話し合いが活発になり、充実するのかを検討する。三つめは、「言語力・読書力を身に付けるための取り組み」である。なお、ここでの「読書力」とは、読書する習慣を身に付けることである。言語力や読書力を身に付けるために日頃から継続して取り組むことや研究授業単位における取り組みなどを工夫する。この三つの視点を指導の重点とし、本年度は取り組みを進めている。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 読みが深まる言語活動と学習課題の設定

- 授業者が教材解釈・分析を行い、作品の特性を捉えることで、文学作品の魅力を味わう。
- 付けたい力に適した言語活動や単元を構成するために、指導案を立案する前に、コンセプトシート(A4 1枚程度に概略をまとめたもの)を作成し、研究部会で付けたい力と言語活動が合致しているかを確かめる。
- 本時のねらいに合った学習課題や学習の流れ、手立てになっているか、指導案検討会で検討する。

視点② 考えが深まる話し合いの手立て

- ハンドサインを活用し、考えを聞き比べることを意識させる。
- 学年や学級の実態に応じて、話し合いの話型を作成し、掲示したり指導したりする。
- 話し合いが行いやすい座席配置を工夫したり、ペアやトリオなど人数を変えたりするなど、話し合いのメンバー構成や場を工夫する。
- 学習課題に応じて、話し合いの観点を明示する。

視点③ 言語力・読書力を身に付けるための取り組み

- 学年や学級の実態を把握し、単元や年間を通して、簡単に楽しんでできる言語力育成の活動に取り組む。
- 図書室を整備し、見出しサインの工夫をしたりおすすめの本を展示したりして、読書環境を整える。
- 研究授業単元だけでなく、年間を通して、図書室や大阪市立図書館からの本の貸し出しを行い、教室の図書環境を充実させる。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 綿密な教材分析を行うことで、指導のポイントが明確になったり、児童の読みを想定して予め手立てを講じたり、授業の流れを適宜変更したりしながら、付けたい力を育むことができた。
- 日頃から話し方・聞き方の指導を行ってきたため、話し方・聞き方が身に付いてきている。話型も児童の実態に応じて変えることで、適切な指導を行うことができた。また、グループでの話し合いを行う際には、メンバー構成にも配慮することで、話し合いが活発に促された。
- 研究授業単元だけでなく、年間を通して、児童の実態に応じた言語力の育成に向けて、意図的に言語活動に取り組んだため、言葉に対する意識が高まってきている。
- 図書室や教室、ピロティなどでの読書環境を整えたり、委員会活動や読書月間などで読書を促す取り組みをしたりすることによって、読書する習慣が身に付いてきている。

(2) 今後の課題

- 児童が自分に合った学びを進められるよう、児童の実態に応じた支援のあり方を模索する。
- 「考えを深める10の思考」(試案)を活用しながら、話し合いを活発に促すようにする。
- 楽しみながら言語力や読書力を育成できる取り組みを継続して行うようにする。